

「上」と「下」のメタファーについて

— 一日中対照研究 —

左 咏梅

要 旨

人間が自分を取り巻く外界をどのように知覚しているのかについて、明らかにすることは、人間の認知活動を知る上で非常に重要である。言葉には、外界に対する知覚と理解のかかわるさまざまな認知のモードが反映している。特に場所・空間の認知のプロセスは、言葉の意味や思考、社会的論理関係にかかわる重要な要因となっている。主体が外界を知覚し、外界を理解していく認知のプロセスには、空間認知や身体的な経験にかかわる主体の認知のモードが複合的にかかわっている。

認知言語学のアプローチでは、日常言語の概念体系のかなりの部分は、外部世界の客観的な反映として構築されているのではなく、われわれの身体性や創造性に根ざすイメージ・スキーマとメタファーを介して構築されているものとしている。この種のイメージ・スキーマを拡張していくことにより、外部世界に対する抽象的な理解が可能となる。この種のイメージ・スキーマの拡張は、日常言語においても重要な役割を担っている。本稿においては、先行研究を踏まえた上で、「上」と「下」のメタファーに対して分析と考察をおこなっている。特に従来の研究ではあまり扱っていない中国語の独特の表現を提示し、中国語と日本語のメタファーの相違点に関して、詳しく分析している。時間のメタファーの図を作成したが、これは中国語のメタファーを解明する際有意義なものである。

キーワード：イメージ・スキーマ、メタファー、上、下、拡張

I. はじめに

外界認知にかかわる経験の中でも、特に場所・空間の認知にかかわる経験は、日常言語に対して重要な役割を担っている。言葉は、この意味で外界に埋め込まれた人間の認知のプロセスの現れである。外界に対する主体の主観的なパースペクティブ、主

体の身体性にかかわる視点が反映されている。この種の経験は、場所・空間を直接に反映する経験として理解されているのではない。山梨（2000：139）によると、認知主体としてのわれわれは、具体的な経験によって作られたイメージ・スキーマを介して対象を把握しているだけではなく、状況によっては具体的なイメージ・スキーマを拡張し、この拡張されたイメージ・スキーマを介してより抽象的な対象を理解している。本稿では、「上」と「下」のイメージ・スキーマを基にして、レイコフの理論を適用し、日本語と中国語の「上」と「下」のメタファーの比較を行い、日本語と中国語における意味の拡張に対して考察を加える。

Ⅱ．先行研究

Lakoff は『認知意味論』（1987）の中で多くの例文を通じて、英語の前置詞「over」のイメージ・スキーマについて詳しく論じた。Taylor は『認知言語学のための14章』（1989）において、「上」と「下」のメタファーについて詳しく述べた。日本の研究者の中では、山梨正明（2000）、瀬戸賢一（1995）、谷口（2003）らはこれに関して深く研究をした。中国では藍（2005）が中国語のメタファーの特徴について独自の研究を行い、メタファーの分類方法と経験基盤の説明を行った。

Ⅲ．イメージ・スキーマ論の現在

イメージ・スキーマ（image schemas）は、人間が世界と日常的に関わり合うことから生じる単純で基本的な認識構造であり、具体的な経験に基づいて形成される心的表象の一種である [Ungerer 池上訳（1998：196）]。言語学の分野で提示されているイメージ・スキーマには、＜上・下＞のイメージ・スキーマ、＜容器＞のイメージ・スキーマ、＜前・後＞のイメージ・スキーマ、＜部分・全体＞のイメージ・スキーマ、＜中心・周辺＞のイメージ・スキーマなどがある。この種のイメージ・スキーマは言語表現の拡張のプロセスと言葉の創造的な側面を考察していく際に重要な役割を担う。

人間の空間認知と言語理解に関する先行研究においては、人間は自らの身体的特徴から獲得された基軸によって空間を認識しているとされている。日常言語の概念構造は、外部世界の経験を反映するイメージ・スキーマの具象レベルから抽象レベルへの比喩的な拡張によって主観的に特徴付けられている。この種のイメージ・スキーマの比喩的な拡張によって、外部世界の対象を把握することができる。特に場所空間の位置関係にかかわる言語表現を考えた場合に、その言葉の背後に存在するイメージ・スキーマの役割を無視するわけにはいかない。山梨（2000：169）は、場所・空間にか

かわる次元の中でも、特に上・下の次元は、日常言語の概念体系の比喩的な拡張を可能とする経験的な基盤として重要な役割を担っていると述べている。

Ⅳ. 「上」と「下」のメタファー

1. メタファーの意味

伝統的な定義によると、メタファーとは2つの事物、概念の間に類似性が成り立つ時、一方の形式が他方を表現することを言う。[辻 (2002:16)] 簡単に言えば、メタファーは類似性に基づく比喩である。Lakoff and Johnson (1980:225) は、類似性だけがメタファーの基盤ではないと結論付けている。メタファーは起点領域から目標領域へのメタファー的写像であり、概念メタファーは、一つには「経験的類似性」(experiential similarity)、もう一つには「経験的共起性」(experiential cooccurrence) という二種類の相関関係に基づいているという。

2. 「上」と「下」のメタファーの類型及び分析

メタファーとは基本的な経験を空間の領域から抽象的な認知モデルに写像するものである。Lakoff and Johnson (1980) は、構造のメタファー、方向性のメタファー、存在のメタファーという三種類のメタファーを提唱しているが、本稿で論ずる「上」と「下」のメタファーは方向性のメタファーのカテゴリーに属する。

Lakoff and Johnson (1980) は、英語の「上」と「下」のメタファーをおよそ八種類に分類しているが、以下2.1~2.8において、その分類方法に基づいて日本語と中国語の例文を提示して分析し、さらに、2.9~2.11において、中国語にしかない独特のメタファーについて説明し、不明なところを明らかにしたい。

2.1 「量が多いことは上、少ないことは下」

- (1 a) 毎年自動車の生産台数が上昇し続けている。
- (1 b) 每年汽车的产量不断上升。
- (2 a) 好景気のために、去年のボーナスが上がった。
- (2 b) 因为景气，去年的奖金上涨了。
- (3 a) 今年の留学生は去年より少ない。
- (3 b) 今年的留学生比去年少。
- (4 a) 仕事が変わって、彼の収入は落ち込んだ。
- (4 b) 工作变了，他的收入下降了。

雨が降ると、川の水が増えて、水位が上がっていき、雨がやむと、水位が下がっていく。食べ物を容器に入れて嵩が多くなると、高く見えて、少なくなると、低く見える。例えば、水道の水を流し続けると、お風呂の水面が徐々に上がってくる。栓を抜くと、水面が徐々に下がっていく。

われわれは毎日繰り返し同じ作業をしているうちに、自然に数量と高さの対応関係を発見し、「量が多いことは上、少ないことは下」というメタファーの経験的基盤を形成している。こういう日常生活の経験から得た視覚的、物理的現象が抽象的に拡張されて、「量が多いことは上、少ないことは下」という結びつけが行われる。

こういう生活体験から得られた認識が巧みに日常の生活の中に生かされて、生活と切り離せなくなっているものもたくさんある。われわれは病気になると、まず体温、血圧を測るのが一般的な常識であるが、そんな時に使う計測機器としての体温計、血圧計は、「量が多いことは上、少ないことは下」のもっとも直観的な道具で、こういう道具があればこそ、体温、血圧などの抽象的なデータを簡単に把握できて、専門的な知識なしに理解することができるのである。

- (5 a) 石油の値上がり。
- (5 b) 石油上涨。
- (6 a) 石油の値下がり。
- (6 b) 石油下跌。
- (7 a) 合格率が上がる。
- (7 b) 合格率上升。
- (8 a) 失業率が下がる。
- (8 b) 失業率下降。
- (9 a) 人口が増える。
- (9 b) 人口上涨。
- (10a) 人口が減る。
- (10b) 人口下降。

以上の例では、「上下」の軸が「量の多い少ない」と密接に結びついている。「上」が量の増加に、「下」が量の減少にそれぞれ写像される。この時、「上下」のメタファーが数量の領域に拡張する場合、一定の対応性を持っている。すなわち、あるものが「上」の方に拡張すれば、必ず反対側の「下」の方にも拡張される。それに、この拡張の経路は有意義な方向性を持っている。つまり、「上」に行く経路は「量が多いこと」、「下」に行く経路は「量が少ないこと」につながるのである。

2.2 「支配力があるのは上、支配されるのは下」

- (11a) 彼は最近重要なポストに昇格された。
- (11b) 他最近被升上了重要的岗位。
- (12a) 彼女は彼の支配下にいる。
- (12b) 她在他的管束之下。
- (13a) 上には政策があり、下には対策がある。
- (13b) 上有政策，下有对策。

以上では、力の行使とそれを被る側との関係が、「上下」の軸を使って表されている。Lakoff and Johnson (1980) の説明によると、このメタファーは身体的、社会的な基盤がある。特に、原始社会の部落に体格と力の強さが、部落での地位と深くかかわりがある。体が大きく背が高ければ、身体的な力が強くて勝ちやすい。それに、闘争の勝利者が上に立つ、そして敗者は地面に倒れるという事から考えて、支配力があるのは「上」、ないのは「下」ということである。「支配力があるのは上、支配されるのは「下」という概念メタファーは、こういう空間的な位置関係に関する基本的な経験から導かれる。動物の世界も同じで、一番強いものが支配者になる。この点は近代生物学の進化論にも当てはまるといえるだろう。

歴史上権力を握っている統治者たちは高いところにお城を建てて、天下を統治する。玉座も一段高いところに設置し、下に立っている者を見下ろすのである。「高高在上（高いところにいる）」、「居高臨下（高いところにいて下を見下ろす）」という言い方はこのメタファーの表現である。北京の紫禁城にある太和殿は皇帝が大臣と面会するところであり、その中の玉座は床面より高い台に設置するのである。このようなことから「上下」の関係が日々実感されるに違いない。

「上」と「下」が逆になったらどうなるかを考えてみたい。この問いに答える上で触れなければならない事がある。それは有名なルビンの花瓶で引き起こされた「図と地の反転」と言われる現象である。次の(14)(15)は上下の逆転する例である。

- (14a) 政府は転覆させられた。
- (14b) 政府被颠覆了。
- (15a) 造反議員
- (15b) 造反议员

以上の例文は、「支配力があるのは上、支配されるのは下」のメタファーとつながっている。Lakoff の議論に従えば、その背後にあるメタファーが、上記の表現より喚

起される。事件が発生する前には政府は支配権を握っている（メタファーによれば正立している）が、事件の後では支配権を持っていない（メタファーによれば倒れている）（Lakoff 1987）のである。もともと正立しているものが倒れると、大騒ぎになる。これと密接につながっているのが次に述べる「高い地位は上、低い地位は下」のメタファーである。

2.3 「高い地位は上、低い地位は下」

- (16a) 高い立場にある人は理解できない。
- (16b) 处于高位的人无法理解。
- (17a) 彼は結婚してから出世の階段を上っている。
- (17b) 他结婚后登上了升官的阶梯

上の2.2の「支配力があるのは上、支配されるのは下」と同じようなメタファーを補う形でもう一つのメタファーが機能している。それは2.3の「高い地位は上、低い地位は下」である。メタファーによる言い方をすれば、人を支配する力を持つ人は、ランドマークより高い位置にあるトラジェクターなのである。つまり、権力関係を言葉で表現するときに位置関係を表す表現を使っているというのは、基本的なイメージ・スキーマの構造を、「物理的な空間」の認知モデルから「権力関係」の認知モデルに認知的に拡張しているからである。

秩序的な現代社会において、人々の社会的な地位は権利の大きさと深く関わっている。地位が高ければ、権力も大きく、地位が低ければ、権力も小さい。中国の漢の時代には人物を評価するために九つのランクを設けた。「上上、上中、上下、中上、中中、中下、下上、下中、下下」という。これはいわゆる九品である。中国古代の皇帝に対して「皇上」、「聖上」という尊称を使っていた。権力をたくさん持っている人が「上」、少ない人が「下」ということは、2.1での「量が多いことは上、少ないことは下」とお互いに照応している。

このメタファーは私たちにとってあまりにも馴染み深いものであるため、権力関係を言葉で表現するときに位置関係を表す表現を使っているという事実にもまったく気付きもしないほどである。昔から、天皇や江戸幕府の将軍は、ほかの人々よりも一段高い座に座ったという。これは身分の上下を空間的位置の上下の形で表したものである。そして、スポーツ大会の受賞式典でも同様のことがいえる。金メダル選手の台は銀メダル選手の台より高く、銀メダル選手の台は銅メダル選手の台より高く、国旗も金メダル選手の国の国旗が一番高く目立つようになっている。

日本も中国も「縦」の関係を重んじる国である。日本語にも、中国語にも、「上座」「下座」という言い方が存在し、時代や場所を問わず、高い位置には身分の高い人物が座するのが慣わしになっている。ここの「上座」「下座」という呼称は、座敷に高低があるわけではなく、恐らく座敷に潜在的に存在する地位の価値観が読み取られるのではないかと思われる。興味深いのは、「下にも置かぬ」という表現である。辞書の説明によると、「下にも置かぬ」とは客人などを「下座に置かないように」ということである。これはもともとは「上座」「下座」の概念に関わりがある。部屋の中に「上座」と「下座」、「上席」と「末席」の区別を設けると、意外に喧しい場合もある。瀬戸（2005）は今の円卓会議はこれと関わりがあると指摘する。すなわち、多くの国の代表が集まるときは、そこに序列らしいものを設けると面倒な問題を引き起こすので、ラウンドテーブル方式にするのである。

藍（2005）は「高い地位は上、低い地位は下」という概念メタファーを論ずる際、以下のような中国語の語句を提示している。

- (18a) 上流社会
- (18b) 上流社会
- (19a) 下流社会
- (19b) 下流社会
- (20a) 上司
- (20b) 上司
- (21a) 上級部門
- (21b) 上級部門
- (22a) 下級部門
- (22b) 下級部門

以上の例は、共に「高い地位は上、低い地位は下」という概念構造を示す例である。概念メタファーが経験のゲシュタルトを介して得られるものであるとすれば、文化的な相違が当然ながら生じてくる。谷口（2003）は、以下の例で、文化性が日本語の表現に与える影響も示唆している。

- (23) 上り電車
- (24) 下り電車
- (25) 上京する

東京では「上り電車、下り電車」をよく耳にする言葉である。京都でも上りと下り

に分かれていることが知られている。都が「上」、それ以外の地方を「下」とする概念化には、二つの方向性のメタファーが根底にあると考えられる。一つは、2.2の「支配力があるのは上、支配されるのは下」のメタファーから、国をつかさどる機関の所在地であるという点で首都は「上」である。もう一つは、2.3の「高い地位は上、低い地位は下」のメタファーから、「上」を国の機能の中心地、「下」を地方と捉え、「上り」「下り」といった表現でその間の行き来を表現しようとしたものである。

ここの「上」と「下」は方向性のメタファーの具現化であって、文化性と密接に結びついている。明治維新まで京都に皇居が置かれたため、京都の周辺などはほかの地域より「上」の存在となり、これに似た中国語の表現も存在する。これは中国の影響もあるのではないかと思われる。中国では、北京の近くに住んでいる人々は北京に行く時、「上北京」という。ただし、北京から出る時は「下北京」とは言わない。そして、「街に行く」、「市内に行く」、「城内に行く」時は、今でも、「上街」「上市内」「上城里」というのである。

生活の中にもう一つの好例がある。われわれは道を尋ねられた時地図を描いてあげることがしばしばある。地図を見せるとき、上のほうが北で、下のほうが南であることは共通理解となっている。それは最初地図を描いた人はほとんど北半球の出身者で、不動のように見える北極星のある北極を大切にしているから、上を北にしたのである。もし、最初の方が南の出身者であれば、逆になるであろう。実際オーストラリアの地図は南極が上になっているものがある。この結果は、「高い地位は上、低い地位は下」のメタファーと一致している。

中国語には、「北上哈尔滨（北のハルビンまで上がる）」、「南下广州（南の広州まで下がる）」、「郑和下南洋（鄭和は南洋に下がる）」という言い方がある。これは空間の縦の軸ではなくて、横水平の軸によって、空間の領域を表現するのである。

2.4 「嬉しいことは上である・悲しいことは下である」

- (26a) 気分は上々だ。
- (26b) 心情好极了。
- (27a) 天にも昇る気分だ。
- (27b) 飘飘欲仙。
- (28a) 好きな人に振られて落ち込んでいる。
- (28b) 被喜欢的人抛弃，意志消沉。
- (29a) 気分が沈んだ。
- (29b) 心情低落。

私達は、楽しい時、嬉しい時には姿勢が上向きになり、逆に、悲しい時にはうつむいた姿勢になる。感情と姿勢の連動という身体的な理由から、「嬉しいことは上、悲しいことは下である」という結びつけが行われる。(谷口2003:22)

(30) 昂首挺胸 (頭を上げて、胸を張る)

(31) 垂头丧气 (しょんぼりと元気の無い様)

中国語の中に、上のように「昂首挺胸」、「垂头丧气」という表現がある。「昂首挺胸」は楽しい、幸せのような積極的、プラスの気分の時、「垂头丧气」は、悲しい、落ち込んでいる時の消極的、マイナスの心理状態を表す。これと密接につながっているのが上述の「嬉しいことは上である・悲しいことは下である」というメタファーである。

2.5 「健康と生命は上、病気と死は下」

(32a) 彼は体力の絶頂期にある。

(32b) 他现在处于体力的最高峰。

(33a) 病気がだんだん悪くなった。

(33b) 健康每况愈下。

これは、身体的な理由から、健康は「上」との結びつけが行われる。健康な時は起き上がっているが、病気の時や死んだ時には寝た状態になる。人間だけではなく、動物、植物はみんな同じで常に正立した姿勢を維持している。まっすぐに立っているときは生きており、健康で、意識がある。倒れたり、横たわらざるを得ない時は、生命力が脅かされている場合である。

2.6 「良いことは上、悪いことは下」

(34a) 新しい技術を導入し、品質を向上させる。

(34b) 引进新技术, 提高质量。

(35a) 彼は質の高い仕事をする。

(35b) 他从事高质量的工作。

(36a) 株は上向きだ。

(36b) 股票上扬。

(37a) 天気予報によると、明日から下り坂だ。

(37b) 据天气预报, 明天开始降温。

(38a) 今人生の下り坂だ。

(38b) 现在是人生的下坡路。

上の用法を説明する概念メタファーは「良いことは上、悪いことは下」という空間的な位置関係に関する基本的な経験から導かれるもので、理想的な状態は「上」の方に位置し、理想的ではない状態は「下」の方に位置するものと認識される。それで、理想的な状態を目標領域として、移動する傾向が「上」で、逆に理想的ではない状態を目標領域として、移動する傾向が「下」として捉えられる。

人間も、作物も成長するに伴い、上の方へ伸びながら、大きくなる。日の出の太陽が暗闇を破って天に上昇するのを見て、万物が蘇るのように感じられる。地上に縛られた人間は天空に憧れをもっている。古くから伝わってきた伝説からこの望みを読み取れることもできる。一方、落ちる感覚は、現実の恐怖を引き起こす。上には極楽の世界で、下には恐ろしい地獄があるというのは、人間の想像かもしれないが、つまりいて倒れる、高いところから落ちる、山から転落する、海に沈む、飛行機が墮落するというのは決していい体験ではない。ここでは、このような民俗信仰と文化的伝統によるところが少なくないであろう。

何故「良いことは上、悪いことは下」になるのだろうか、「上」というのは、脳や顔、心臓など、重要な器官が集まっている場所であり、良い物、価値のあるものと結びつきやすいのである。反対に「下」は足や地面に近い位置であり、評価は「低い」。「下にも置かぬ」という表現はこのメタファーの拡張と関わりがあると言える。そしてこれに加えて、もうひとつ別の、前にも出てきた2.3の「高い地位は上、低い地位は下」というメタファーが合わせて関わっているということが言えるであろう。

われわれは生活の中によく「高級」「極上」「超高級」「超特上」などの言葉を使って、物の質の良し悪しを表す。質は抽象的なものであるから、「上下」のスケールを借りて、上下で測り、「上を」超えれば、「超高級」や「超特上」などの言葉が考え出される。こういうもともと形のないものが、「良いことは上、悪いことは下」のメタファーで拡張されて分かりやすくなるのである。

2.7 「美德は上、悪行は下」

- (39a) 茶道は高尚な趣味だ。
- (39b) 茶道是高尚的爱好。
- (40a) 彼は上品な芸術品が好きだ。
- (40b) 他喜欢高尚的艺术品。
- (41a) そんな下劣な事は出来ない。
- (41b) 做不出那种下流事。
- (42a) 転落の一途を辿る。

(42b) 毎況愈下。

以上41と42の日本語の例文は谷口（2003：22）による。

「美德は上、悪行は下」というメタファーは、2.5の概念メタファー「良いことは上、悪いことは下」とは関わりがあると思われる。理想的な状態は「上」の方に位置し、理想的ではない状態は「下」の方に位置するという概念を言葉から見て取れる。中国古代では「上天」、「上帝」、「上倉」という言い方があり、「上」は万物を主宰する神の住む世界で、美しい清らかな所である。「下」は人間が住んでいる平凡な世界で、汚いところである。こういう空間的な位置関係に関する基本的な経験から導かれて、「美德は上、悪行は下」というメタファーが生じる。

2.8 「意識があるのは上である・意識がないのは下である」

(43a) 彼の顔が頭に浮かび上がった。

(43b) 他的脸浮现在脑海里。

(44a) 危機の存在を意識下で感じ取っていた。

(44b) 潜意识里感觉到了危机的存在。

上記の例は基本的な経験を空間の領域から抽象的な認知モデルに写像するものである。これは「意識」を目に見える水面のようなものとして捉え、そこに「上下」の軸を加えることにより、可能になった隠喩表現である。「意識されたもの」は「上」というふうな捉え方に対して、「意識されないもの」は「下」というように認識している。

(44a) の「意識下で感じ取っていた」はほんやりと「感じ取っていた」のに、意識の「下」というメタファーの拡張が実現されて、意識の「上」というメタファーの拡張がされていないのは一体なぜであろうか。考えると、脳というものは常に意識の働きの機能を持っていて、外界に対して認知活動をするのが普通の、正常な状態である。こういう通常な認識の構造を生かして何かを意識する場合は、(43a) の「彼の顔が頭に浮かび上がった（他的脸浮现在脑海里）」の例のように、見えないところから見えるところに際立たせて、「上」のメタファーの拡張を利用する必要がある。

一方、正常な意識に対応するもう一つの認知活動がある。それは無意識のうちに自然に感じ取ることである。正常な意識というより、むしろ意識のない、臨時にその都度感じる一瞬の感覚かもしれないが、なんとなく感じられるという暗黙知のような世界で、それを(44a)の「危機の存在を意識下で感じ取っていた（潜意识里感觉到了危机的存在）」に表すように、「下」のメタファーを使う。中国語では、このような人

間の認知活動を「下意識」或いは「潜意识」という言葉で表現する。

以上において英語と日本語と中国語の中のメタファーの共通性について説明した。この他に中国語には独特なものがある。以下において中国語の特有の例について考えてみたい。

2.9 「過去の時間が上、未来の時間が下」

中国語には、時間の二つの捉え方がある。一つは「横」の軸であり、時間が「横」の軸に沿って流れているのに対して、もう一つは「縦」の軸であり、時間が「縦」の軸に沿って流れている。この二つのタイプがともに現実の生活の中でよく使われている。「前後」の軸による時間の捉え方は日本語も中国語も一致している。ここでは、「縦」の軸の時間のメタファーについて分析したい。「縦」の軸の時間のメタファーの事例を見てみよう。先行研究では時間軸を斜めの直線で示したものがある（瀬戸1995、藍2005）。しかし、筆者は図-1のような図がもっと明確に時間のメタファーを表現できると考える。

図-1 「縦の軸の時間図」

(左咏梅作成)

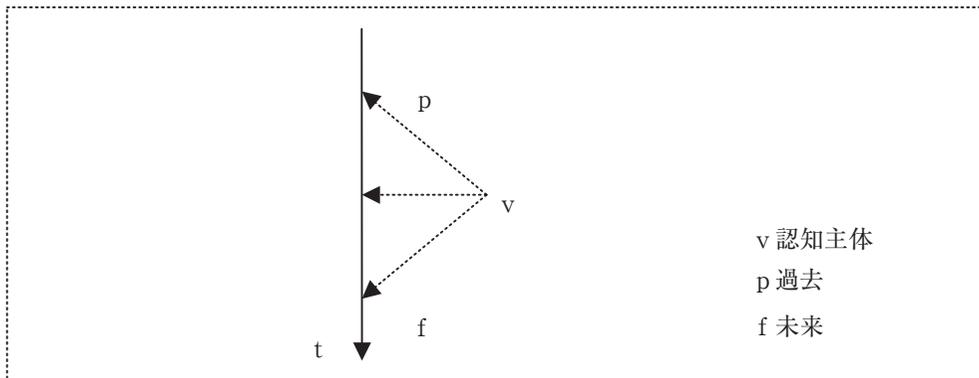


図-1の矢印の実線は歴史の時間の流れを表すが、時間は「縦」の軸に沿って流れている。vは認知主体で、点線の矢印は認知主体の視線が向かっている方向を表す。上の方が過去、真ん中の時点が現在、下の方が未来を表す。図-1が示しているのは、視点が「縦」の軸に沿って動いていることである。長い時間の流れの中で、古い時間帯は「上」のほうに、新しい時間帯は「下」の方に、すなわち早い時間は「上」のほうに、遅い時間は「下」の方に相対的に位置する。主体は過去から未来に向かって「縦」の軸に沿って歩いてくるが、たまには、逆の方向に向いて、「上」を顧みる事が出来る。それでも、「上」は過去、「下」は未来として設定されている。

(45) 上次（前回）——下次（次回）

- (46) 上半夜（夜12時前）——下半夜（夜12時後）
- (47) 上旬（上旬）——下旬（下旬）
- (48) 上半年（上半期）——下半年（下半期）
- (49) 上一代（前世代）——下一代（次世代）
- (50) 上半辈子（前半生）——下半辈子（後半生）

以上（45）～（50）は藍（2005）が指摘した例である。以下の例は小学館の『中日辞典』による。

- (51) 上午（午前）——下午（午後）
- (52) 上个月（先月）——下个月（来月）
- (53) 上个星期（先週）——下个星期（来週）
- (54) 上个礼拜（先週）——下个礼拜（来週）
- (55) 上周（先週）——下周（来週）
- (56) 上半月（月の前半）——下半月（月の後半）
- (57) 上个年度（前年度）——下个年度（来年度）
- (58) 上学期（前期）——下学期（後期）
- (59) 上个世纪（前世紀）——下个世纪（来世紀）
- (60) 上代（前世代）——下代（次世代）
- (61) 上一辈（前世代）——下一辈（次世代）
- (62) 上半场（試合の前半）——下半场（試合の後半）

このように時間表現は空間表現を用いてメタファー的に写像するのである。中国語の表現によると、「上午（午前）」があれば、「下午（午後）」があり、「上周（先週）」があれば、「下周（来週）」があるように、「上」と「下」が対になって、対応している。「上午（午前）」をいう場合には、「下午（午後）」という言葉が話題に出なくても、話者と聞き手が話題の背後に存在する午後のことに対して暗黙のうちに共感しているのではないかと思われる。われわれは「縦」の軸で出来事の時間を話題にする時、その歴史の長い時間の中の極短い期間だけを際立たせ、「上下」の軸でそれを表すのである。

しかし、日本語の表現は中国語と違うところがある。例（47）の日本語の表現を見れば分かるが、漢語は中国語と一致しているが、和語であれば、やはり「上下」の軸ではなくて、「前後」の軸を使って表されているのである。例えば：先月と来月、前年度と来年度、前世紀と来世紀。日本語は時間を空間の「前後」の軸を利用して捉えているのが多い。漢語はもともと中国から伝わってきた言葉で、言葉そのものが日本

に入ってきて、日本人の生活に深い影響を与えると同時に、中国人の時間の捉え方も日本人の考え方の一部として定着したのではないかと思われる。

以上は時間を表す専用名詞であるが、次の構文の場合はどうであろうか。

- (63) 追溯汉代（漢の時代へ遡ってみる）
- (64) 沿着历史的长河逆流而上（長い歴史の流れに沿って遡る）
- (65) 一代一代传下去（代々伝わっていく）

上記の構文を見ると、中国語と日本語は一致している。中国語も、日本語も「上下」の軸で表すことが出来るが、上下の軸は中国語の方が日本語より多く使われている。中国語の「上家」、「下家」はトランプやマーじゃんなどの用語で、上手（かみて）の人、前の番の人を「上家」と表現し、下手（しもて）の人、後の番の人を「下家」と表現して、もともと横にいる人を「上下」の軸で捉えている。これは普段の生活基盤と密接な関わりがあるのであろう。中国には「上古」という言葉が歴史上の殷、周、秦、漢の時代を指す。われわれは家系図を書くとき、いつも年代によって祖先を一番「上」のほうに、上から下まで順番に書くのである。逆に書く人は誰もいない。カレンダーの1月から12月の並べ方も、1月が「上」、12月が「下」というように、順番に並べているのである。これを考えると、過去が「上」、未来が「下」ということが自然に導かれるのではないかと思われる。

2.10 「前の方が上、後の方が下」

- (66) 上卷（上巻）——下卷（下巻）。
- (67) 上册（上巻）——下册（下巻）。
- (68) 上篇（上篇）——下篇（下篇）／文章の上の部分と下の部分
- (69) 上联（上聯）——下联（下聯）／対聯の上の部分と下の部分
- (70) 上阕——下阕／宋词の上の部分と下の部分
- (71) 上集——下集（書籍、映画の分類法）
- (72) 上部——下部（書籍、映画の分類法）
- (73) 上述（上記）——下述（下記）

文章や本などに二つの部分がある場合には、先に出来上がるものが「上」になり、後に出来上がるものが「下」となる。「上下」の軸を使って、順番をつけることにより、紛らわしいことを避けるようになっている。この点では日本語と中国語は一致している。

2.11 「公的な状態が上、私的な状態が下」

中国語では、会社などに行って、仕事をするを「上班」といい、仕事が終わって、職場から離れるを「下班」という。よく考えると、「上班」というのは自由自在な状態から、まじめで、公的な状態への移行であり、「下班」というのは逆にそういう状態から、自由自在で、私的な状態に戻ることである。そうすると、「上」は公的な状態を表し、「下」は私的な状態を表すことになり、「上」と「下」のもう一つのメタファーが見出される。日本語の中にこういう表現はあまりないが、中国語にはこういうメタファーが沢山見られる。

- (74) 上班（工作中、就業中）——下班（仕事が終わる）。
- (75) 上课（授業中）——下课（授業が終わる）
- (76) 上工（仕事が始まる）——下工（仕事が終わる）
- (77) 上学（登校する）——下学（学校が終わる）
- (78) 上朝（朝廷会議に行く）——下朝（朝廷会議が終わる）
- (79) 上台（政権を握る）——下台（政権を失う）
- (80) 上场（登場する）——下场（退場する）
- (81) 上岗（仕事に戻る）——下岗（自宅待機）
- (82) 下海（商売をする）

下海（商売をする）という表現が興味深い。字面の意味は海に下りることであるが、ここはメタファーの表現として国家公務員が商売することを表す。ここでは「下海」という行為を行う人の身分に注意する必要がある。国家公務員や大学教員などともに政府の部門で公的な仕事を持っている場合、毎日仕事をするを「上班」という。のんびり落ち着いた生活をするが、国から与えられた仕事であるから、公的な状態で「上」のメタファーに当てはまる。一方、国家公務員が職を辞して、自分の会社を設立し事業を展開することは、個人のことであるから、仕事がいくら仕事らしく、忙しくても私的な状態で、「下」のメタファーに当てはまる。それに、海のイメージは広く深いことで、波に浮いたり沈んだりして、命の安全なところではない。金持ちになる前に存在する危険と難しさをメタファーとして表現するのである。「下海」は80年代から生まれた新しい言葉で、経験的類似性から写像されたメタファー表現であって、そのペアとしての言葉「上海」は生まれていない。

2.12 「見えるものが上」

- (83) 理論の上——理論上
- (84) 教育の上——教育上
- (85) 形式の上——形式上

(86) 想像の上——想象上

上記の例は日常生活の中によく使われるものである。(83)～(86)の例文の中に出る理論、教育、形式、想像などは抽象的なもので、理解しにくいものである。それを理解するにはイメージ・スキーマからメタファーに拡張する必要がある。上記の表現では、抽象名詞+「上」で、物事の側面や範囲を表す。すなわち、物と物の位置関係を表す具体的な世界から、抽象的な物事の世界に広がり、拡張を通して、物事の側面や範囲を表すようになるのである。

見えないものが見えるようになるということの中には、本来「下」にあるものが「上」に出てくるからである場合がある。これは「上」の基本的な意味に含まれる空間性と関わりがある。このような使い方は日本語も中国語も同じである。「意識があるのは上、意識がないのは下」(2.8)というメタファーがあるが、「上」というメタファーの拡張がなされて、「上」としての捉え方をされたのは、たぶん同じ理由によるのではないと思われる。つまり、目に見えない水面「下」のようなものを、「上」の軸を加えることにより、話題の中のいくつかの要素からある要素、例えば「理論」を際立たせて、プロファイルさせることによって、メタファー表現が実現したのである。

V. 終わりに

「上」と「下」のイメージ・スキーマがメタファー的にどのように適用されているのかについては、以上のメタファー表現の諸例に示されている。こうした例すべてが示していることはメタファーは単なる文学における言葉のあやではなく、より根源的に私たちの思考、概念の基礎を成し、日常言語にも広く浸透しているということである。われわれの日常経験の理解の多くはメタファーによって構造を与えられている。

「上」と「下」は日本語でも中国語でもよく使われる言葉であるが、「上下」の次元のメタファーにより、以上のような抽象的な概念の理解が可能となっている。拙稿では、沢山の用例を挙げて、「上」と「下」のメタファーに関し、日本語と中国語の比較と分析を通じて、言葉の背後に存在するものを明らかにすることをめざした。言語教育の立場から考えても、有意義なことであると思う。その中の一部の中国語のメタファーに関する解釈は個人的な考えで、理論的には定着していない。以上の分析は中国語のすべての表現をメタファー的に解明したとは言えない。今後とも新たな研究を続けたい。

最後にこの稿につきましてご指導くださいました先生方に心よりお礼申し上げます。

<参考文献>

- John R Taylor. 1989. *LINGUISTIC CATEGORIZATION Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford University Press.
- 辻幸夫訳 (1996) 『認知言語学のための14章』 紀伊国屋書店
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Univ. of Chicigo Press.
- 池上嘉彦他訳 (1993) 『認知意味論——言語から見た人間の心』 紀伊国屋書店
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphor We Live By*. Univ. of Chicigo Press.
- 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』 大修館書店
- Ungerer, Friedrich; Schmid, Hans-jorg. 1996. *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Addison Wesley Longman Limited.
- 池上嘉彦訳 (1998) 『認知言語学入門』 大修館書店
- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』 講談社
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』 研究社
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』 大修館書店
- 瀬戸賢一 (1995) 『空間のレトリック』 海鳴社
- 瀬戸賢一 (2005) 『よくわかる比喩——ことばの根っこをもっと知ろう』 研究社
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開メタファーとメトニミー』 研究社
- 田中茂範 松本曜 (1997) 『空間と移動の表現』 研究社
- 牧野成一 (1978) 『言葉と空間』 東海大学出版会
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 くろしお出版
- 辻幸夫 (2002) 『認知言語学キーワード事典』 研究社
- 『中日辞典』 (2003) 小学館
- 藍純 (2005) 『認知言語学と隐喻研究』 外语教育与研究出版社